

東京大学・国家安全保障研究会

航空幕僚長 田母神俊雄空将講演会

2008年5月24日 東京大学・安田講堂

—極東の軍事情勢と21世紀における我が国の進路（その1）—

航空幕僚長の田母神でございます。ただいま拍手して頂いた方に限り、厚く御礼申し上げます（場内爆笑&拍手）。今日はこんな一杯、人がおられる。マスコミの方も一杯入っておられるという事で緊張しておりますけれども、爆弾発言を期待している人もいますけれども、今日は期待出来ないと思います（場内笑）。防衛白書を、今からずっと読みます（場内爆笑）。副官、防衛白書はどこだ？（場内爆笑&舞台の袖より副官、忘れてしまいましたと応答）忘れてしまったという事ですので、喋らせて頂きます（場内笑）。今こうやって壇上から見させていただきますと、最近の東大生って歳とってますね（場内爆笑）。東大生、もっと若いと思ったらですね、まあそんな感じでございます。防大出のユニフォームの制服自衛官ですね、私みたいなものが、この安田講堂で講演をさせていただくというのは、初めてだという事です。今日は大変光栄に思います。

実は私も自衛隊に入った頃ですね、昭和42年ですか。40年位になりますが、「国を守る」という言葉を聞いた時にですね、何となく違和感を感じたことがありますね。「あれっ、どっか違った世界に来たかな」若い学生さんの中にはそう感じる人もおられるかも知れませんが、日本以外の国が「国を守る」というのは、ごく普通の事ですね。何となく日本だと、「国を守る」というと、何か右翼じゃないのかなという風に思われたりするんですけども、今日は皆さんも私の話を聞きながらですね、一自衛官の人と為りを理解して頂ければ、本当に有り難いという風に思っています。

東京大学は、私が言うまでもなくですね、日本のリーダーを作るという事で19世紀から作られ、帝国大学、1886年に設立されました。明治維新後、この国のリーダーを作るんだという事で作られて来た大学という事です。ここで私がお話をさせて頂くというのは大変嬉しく思っています。私は昭和46年の防衛大学校卒業なんですけれども、元々は地对空ミサイル第I種というのが有りました。ナイキ（ミサイル）の運用ノウハウを扱うところで、戦闘的になりそうで最初は行かないのですが、どうも私は戦闘的になれなさそうです。自衛隊では部隊を運用する所属に行きたいと思ひまして、当時はパイロットと、それから飛行機を地上から指揮するコントローラーですね、要撃管制という職域があります。それと、高射運用という職域がございまして、パイロットになろうか管制になろうか何にしようかという事ですね、当時は今の第3高射群までしかなくてですね。比較的町に近いならばという事で、要撃管制だと離島に勤務する可能性もあるという事です。そういう事で、あまり僻地に行かないようにしないと、という崇高な理由で（場内笑）高射運用を選んだという事があります。

若いとき、私は九州・沖縄で過ごしたんですけれども、幹候校（幹部候補生学校）を卒業する時に、仲良しに「出来ればスキーを覚えたいなあ」と言いました。配属の面談でも「北海道をお願いします」と希望しました。配属を決める上官も「わかった」という事で九州に配置になりました（場内爆笑）。九州に私は6年半勤務しまして、また北海道を希望したんですね。「お願いします」「そうか」という事で、沖縄に配置されました（場内爆笑）。昔は航空自衛隊もたいへん意地悪でしたね。今はそういう事はありませんね。今は本当に、そういう個人の事情を出来るだけ配慮してですね、やっているという事があります。

— 極東の軍事情勢と 21 世紀における我が国の進路（その 2） —

自衛隊に入ったのはついこの間くらいの感じだと思っていたんですが、私ももう間もなく 60 歳になります。60 と言うとあの、昔、私たちが若い頃にですね、「村の渡しの船頭さんは 今年 60 のお爺ちゃん」という歌があります。「年はとつても 櫓（ろ）を漕ぐときは 元気いっぱい 櫓がしなる」。その言葉は 20 歳の頃に、60 と言うと凄い年寄りだなあという風に思ってしまったけれども、いま自分がその年になってみると、なんのなんのと言う感じですね。まだまだ頑張るぞという感じなんですけれども、まあ若い人たちから見ればですね、何を言ってるんだと言われそうな気がしますけれども今年、本当に 60 になっちゃうんですね。60 になると何か還暦というのがあって、色々な服装をしなきゃいけないという事で、やりたくないなあと思っております。

で、今日は自衛隊の、まず全般のですね、毎日自衛隊って何やってるんですかと、皆さんも判っておられない人が、いっぱい居ると思います。自衛隊はいったい何をしているのかという事を紹介してですね、それから、やはり自衛隊というのは強いんですか、弱いんですか、どうなんですかと言うような辺りをですね。それから更に自衛隊の、航空自衛隊の戦力構成はどうなっているのでしょうか、という様な事を。そして今後、21 世紀をどうして行くかという話をして行きたいと思えます。

私、実は小池百合子・元防衛大臣からですね、実はトム・クルーズと呼ばれてたんですけれども（場内爆笑）。3 年数ヶ月前にですね、頭部を開く手術をしたんですね。これは国家機密だから喋ったら駄目です（場内爆笑）。自覚症状は全く無かったんですけれどもですね、人間ドックに入ってから MRI を撮ったら、頭の右側の後ろに 2 センチ位の腫瘍があるという話になったんですね。眩暈はしませんか、頭が痛くなりませんか。いや、全くそんな事はない。だからどうしてなのと聞くと、お医者さんに聞いたら、その MRI に腫瘍が映っている。それで、頭を開けないと悪性か良性か判らないという事です。それではしょうがないかという事で、いま頭の手術をするのは簡単です。たったの 2 週間です。2 週間開けまして、7 時間半の手術です。私も健康には自信があったんですけれども、私がこんな大ごとになってしまうのは夢にも思わなかったんです。開けたら、幸いにも良性でした。で、取ったらですね、顔が歪んじゃったんですね。いま、3 年が過ぎて殆どトム・クルーズを超えましたけれども（場内笑）、一時はひどく顔が歪んでいました。金正日が後ずさりするような顔をしていました（場内笑）。そして辛い時代を送っておいりましたけれども、ウチの家内に励まされました。「顔なんか曲がっててもいいんです。どうせ、あなたの心も曲がってます」（場内爆笑）。そしてこの、骨を少し削ったんです。骨は段々伸びてくるらしく、チタンを入れました。1 枚 8 グラム位のを 2 枚ですね。私の頭は正真正銘、チタンヘッドです（場

内笑)。ゴルフをする人は判ると思いますけれども、あまり受けなかったところを見ると、ゴルフをする人は少ないんですね（場内笑）。

そんな事を喋っていると時間が経ってしまいますので、じゃあ自衛隊は何をしているかという話に行きたいと思えますけれども、ひとつはですね、対領空侵犯としての活動を毎日おこなっています。それから災害派遣とか国際緊急援助の待機をしていますね。それに周辺諸国の軍事情報の収集、これも毎日やっていますね。それからイラク復興支援の空輸活動を航空自衛隊は今、クウェートに展開しております。あと、そういった活動を行うために自衛隊に入ってきた隊員はですね、鍛えなければいけませんね。教育訓練、これを教育隊で学校とかを作って、そこで教育訓練をおこなっている、という事です。

— 極東の軍事情勢と 21 世紀における我が国の進路（その 3） —

あと市ヶ谷ではですね、防衛省や航空幕僚監部が、航空自衛隊を将来どんな形にして行くのかと、周辺諸国の軍事情勢を見ながらですね、それを防衛力整備と我々は呼んでおりますが、これを毎日やっているという事であります。予算要求をしたりして、これはよく皆さんもご存知かと思えます。8月末にですね、財務省に各省庁が提出する概算要求というのがありますが、あれを今、市ヶ谷の防衛省では8月に向かって一所懸命に作業をまとめています。で、8月の末に出してですね、9月以降に財務省と防衛省の折衝があるんです。そして予算が決まって、来年度予算になります。来年使う予算を、今年つくるという作業をおこなっています、これを防衛力整備と言います。

対領空侵犯というのは自衛隊が、航空自衛隊が過去 40 年間以上やっておりますけれども、この回数ではですね、今はすでに 2 万を越えています。1 年あたり 400 回、1 日に一回以上は出動しているという状況です。全国の 28 箇所のレーダーサイトで構え、そして領空および領海、日本周辺に軍用機の情報が上げられた場合、これに対して対処するという事です。この、外国の軍用機に対する対領空侵犯を航空自衛隊がやらないとどうなるか、という事ですね。そうすると、外国の兵力が日本の領空を、日本の上を自由に飛び回るという事になります。自由に飛び回っても良いんじゃないかと言う人もいるんですが、これは決してそんな事はないと思えます。やはり国土の警備というのはですね、これはやっておかないと。やっておかないと何時の間にか、日本の空であるのか他所の国の空であるか分からない事になってしまうと思えます。海上保安庁と海上自衛隊が、海の警備を行っていますね。これも、もしやらなければ、日本の海岸に船が到着しても全く判りませんね。東京湾に船が入っても判りません、外国の船。判らないというか、入ってもしょうがない。それを日本の国がですね、きちっと阻止しなければ、外国の船で一杯になってしまいます。ですから、この国土の警備というのは絶対に必要なんですね。そういう意味で、航空自衛隊が日本の空を守るという事で対領空侵犯を実施していると。レーダーサイトで構えて、全国 7 箇所、北海道から沖縄まで 7 つの基地で、戦闘機が 5 分態勢で待機しています。来たという事で発進して、約 5 分以内に離陸をして対処方法を取るという事になっております。

2 番目に、災害派遣と国際緊急援助ですね。これは日本の周辺に遭難者が出た、山で出た、海で出た。そういった時に遭難者を救助するという事で、全国の 10 数か所の基地でヘリコプターが、

救難機が待機しているという状況であります。それから国際緊急援助という事ですね、外国で地震があった、災害があったという様な時に、これに対応するという事で航空自衛隊はC-130を2機、これが48時間以内に出られるように、常時待機を命じられているという状況でございます。

3つ目には、軍事情報の収集をやらなかったらどうなるか。これは、相手がどの程度の力を持っているか。強いか弱いか、お互いに情報の探り合いですね。そして第二次大戦以降、軍事力というのは所謂、攻めている時ではなく、守る時の事なんですね。それから大きな国、大国同士が軍事力を交える可能性というのは、極めて低いと思います。限りなくゼロに近い。しかし、なぜ軍事力が必要かという事ですね、抑止力なんですね。今、テロ対処というのが言われておりますね、テロ対処。テログループというのはですね、警察力を上回る影響の人がすぐ出て来る訳ですね。警察ですと小銃や機関銃、これを超えるグループというのはすぐに持つことが出来ます。しかし軍や自衛隊と同じような戦力は、テログループが持つことは、なかなか出来ません。そうするとこの国に対してですね、国家に対して何かテロ行為を働こうとしても、なかなか成功しないわけですね。恐らく失敗すると。99.99パーセント失敗するというような話になっている訳です。

警察力があればいいじゃないかと言うと、警察力というのは軍事力の存在を前提にしている訳です。軍事力がなければ、警察だけの抑止力というのは成り立たないんですね。そういう意味で、強いか弱いかというのは、外交交渉のバックになるんですね。外交交渉で、うちの方が強いんだという事は、口に出して言う事はありません。無いけれども、脅威が常に効くという事です。そうするとお互いに、やったら相当ダメージを受けると言う形になっている事が、お互いに武力行使を始める事を躊躇する形になりますね。そういう意味で、相手に対して簡単にはさせないという軍事力を持っている事が結局、抑止力として機能すると思うんですね。戦争を起さない。という事で、これが外交交渉のキーになる、という事ですね。

一極東の軍事情勢と21世紀における我が国の進路（その4）一

若い学生さんの中には「そもそも、国家に軍事力なんて必要なのか？」という疑問をもつ方がおられると思いますが、これは今言った様な事なんですね。警察力だけでは、抑止力というのは成り立たない。警察力というのは、軍事力が存在するという事を前提に存在しているという事なんですね。それから最近、ミサイル防衛の関心が高いですね。新聞にもよく書かれると思いますが、ミサイル防衛、まずそんな事が出来るのかという事ですね。10年前ですと「ピストルの弾でピストルの弾を撃つことが出来るのか」と言っていましたけれども、いま現在、技術的には可能になりました。ご存知のように、日本は直接破壊の抑止力として海上自衛隊のイージス艦、それから航空自衛隊のペトリオット、PAC3というミサイルですね。これを整備してミサイルに対応します。その他ですね、このミサイルは非常に速度が速いという事で通信系ですね。そういうものをきちんと整備をして確立して、ミサイルが飛んで来たら直ちに対応できる、撃ち落とせるという態勢が出来ていないと駄目なんですね。ミサイルが打ち上げられる、それから相談しますというのでは対処が出来ません。北朝鮮から日本に飛んで来るといっても、ほんの10分以内に来てしまいます。今はイージス艦、パトリオット、それと自衛隊はC4ISRと呼んでおりますが、こういう通信系ですね。コミュニケーション、インテリジェンス。そういったものを整備して、これに対応するという事ですね。

ミサイルが一杯飛んで来たらどうするか？ 山ほど飛んで来たら、(迎撃網を) 抜けて来るものが有るかも知れない。ミサイルというのは、極めて政治的に使われる兵器だと思います。いう事を聞かなければ撃つぞ、という様な事ですね。このミサイルがどの程度の破壊力を持つかと言うと、核弾頭を積まない限りは、ミサイル一発が運んで来る破壊力というのは、あまり大した事が無いんですね。100メートル単位でミサイルを撃つとかでないと、この建物の中で死ぬ事はないです。航空自衛隊は毎年、爆弾の破裂実験をします。毎年2発、航空機から爆弾が落ちたと言う想定で。地面に投下して上手く潜っても、航空自衛隊の持っている爆弾で直系4メートル、深さが2、3メートルの穴が開くという状況になります。コンクリートだと、この限りではありません。中心から50メートル先に車両を置いて、この車がどれだけ壊れるか。そういった実験をしても、それほど被弾しない場合が結構多いです。

それから、ミサイルが飛んで来るとですね。日本中、東京が火の海になると思っている方が多いですけども、決してそんな事は有り得ない。ただ、核を積むと一発で何万倍、10万倍という破壊力を持ちます。したがって核とミサイルが一体となるとですね、言う事を聞かないか、撃つぞ。という様な使われ方をする訳です。

— 極東の軍事情勢と 21 世紀における我が国の進路 (その 5) —

次は、自衛隊って実力はどうなんですか。周辺諸国に比べて自衛隊はどうか、勝ちますかという事をよく聞かれますけれども、自衛隊はいわゆるバブル崩壊なんですね。日本はうんと高い経済成長をして来ました。防衛費もそれに伴って伸びていきました。そういう中で、日本の防衛力もそれなりに伸びて来ました。バブル崩壊前、15年前ぐらいですか。自衛隊でも、いわゆる物的戦闘能力は、周辺諸国に対して負けないものになっておりました。充分なものになっておったという風に思います。しかし、バブル崩壊以降はなかなか予算が伸びません。ご存知のように中国は20年連続2桁で伸びている。ロシアもこの8年間、平均16パーセント増えています。韓国もこの8年間、6パーセント伸びています。台湾も伸びているという中で、日本だけが防衛予算は伸びないという状況にあります。そうすると、この(遅れた)20年の努力をしないと置いていかれます。段々と戦力が、相対的にダウンしてしまうのです。まだ今は大丈夫だと思いますけれども、この状態が数年続くと、ちょっと危ないなという状況になって来るのではないのかなという気がしております。

航空戦力において、普通の国の空軍というのは大体、攻撃力が主体なんですね。日本は防空という事で、守ることが主体。攻撃の面は日米安保でアメリカにお願いしています、という格好になっております。パイロットの錬度とか、防空に限れば航空自衛隊のパイロットの錬度というのは、世界でも一流の所にあるという風に思います。このパイロットを作るのにもですね、実は6年から7年。4機編隊なら編隊長から、戦闘機は大体4機を基本として行動しますので、この4機編隊を作り上げるのには10年位かかっちゃうんですね、最初から数えると。この航空戦力というのは、作るのに非常に時間が掛かるということなんですね。今年強化したら、もう来年からすぐ強くなるという風にはなかなか直ぐいかないということです。かなり長期錬成で手を打っていないと、気がついた時にはどうにもならない、ということになる訳です。だから我々も、そう

いう意味ではこの日本の安全保障をより確固とする為に、パットナム（訳者注：ソーシャルキャピタルの例え？）なものにする為に、頑張らなければいけないという風に思っています。

それから、航空戦力というものは、装備品の性能はですね。質的な優位を保てないとなかなか、空中戦闘とかそういったものには勝てないという事ですね。ゼロ戦が何百機あっても、F15には勝てないです。まあ、そこまでの差はなくても、やはりこの性能差というものは決定的ですね。ですから我々は、世界の国の戦闘機が一体、どういった戦闘力を持っているのかという事をよく分析して、それに負けないだけのものを整備して行かなければいけないという風に思っています。

日本は装備品の殆どをですね、主要な部品をアメリカから買っていますが、アメリカも一番良いものはなかなか売ってくれません。必ず1世代、あるいは2世代遅れたものしか売ってくれないですね。ですから詳しいことを申し上げるとは出来ませんが、F15戦闘機はアメリカよりも日本のほうが多く飛んでいますね。どちら性能が高いかというと、皆さんの想像するとおりにです。戦闘機はですね、言わば今はミサイルとかを発射する為のプラットフォームですね。この戦闘機の機動力とかそういったものはもう限界です。人間の体力が追い付かないんです、これ以上Gを掛けてというと。戦闘機は旋回したり宙返りしたりする度に、体重の何倍もの重さが身体にかかるんですね、何倍もの重さ。で、それを我々はGと呼びますが、3Gと言うと体重の3倍の重さが身体に掛かるということですね。それが今の戦闘機ではですね、8G、9Gとか掛かるんです。それ以上掛けても、もう人間が耐えられないという。あとは戦闘機が如何なる態勢でもミサイル発射できる、レーダーが出来るだけ遠くまで及ぶ。あるいは空を飛び交う、電氣的なレーダーの妨害を受けたときですね。妨害を受けても、それを排除できる。そういったレーダーとかミサイルの性能、これが高くないとなかなか、部隊の戦闘に勝てないのです。これは最近、アメリカのF22とかF30とか、戦闘機はいま、4世代まで有るんですね。第5世代と呼ばれる、いわゆるステルスという、レーダーに映らない飛行機も出て来ています。このレーダーに映らない飛行機が出てくると、これにどう対応するかという事ですね。レーダーに映る飛行機と、レーダーに映らない飛行機ではもう、映らない飛行機が勝つに決まっています。そういう意味で、航空戦力というのは常に、技術との勝負なんです。それともう一つは、飛行機には稼働率というものがあります。自動車の場合、買った後は殆ど整備しないとしても、1年か2年なら動きます。ところが飛行機は、戦闘機はそういう訳にはいかないんです。

— 極東の軍事情勢と 21 世紀における我が国の進路（その 6） —

一回の飛行から降りてくる度に、飛行機は必ず整備を必要とします。上がる場合にも整備を必要とします。（相次ぐ離着陸に）追われることも多いです。結局、整備力というのも戦力のひとつなんです。整備力。戦闘機も大体、3年とか5年経つと、日本では会社に搬入をして、会社でオーバーホールをして、また使えるという状態にして部隊に戻すという具合です。このオーバーホールを行うのにも、何か月もかかるという状況なんです。昔の旧軍では飛行廠（ひこうしょう）といって、軍の中に工場を抱えていた訳ですね。

でも今は、自衛隊の中にはそういうものは無くてですね、よく言われている三菱重工とか川崎重工とか、富士重工とか石川島播磨重工、今のIHIという名前が変わっていますが、そういう

所に入れて、そしてまた、使えるようにして自衛隊に戻す。結局その、会社の整備能力がやはりこの、戦力の一部になっているんですね。したがって会社がですね、経営がうまく行かないと自衛隊の戦力価値に影響してしまうんですね。だから、防衛産業を守るということもですね、この自衛隊の、やはり重要な仕事なのです。

学生の皆さんは、自衛隊の（装備品を）作っている会社ってどんな会社なのかなと思うでしょうか。名前を聞くような会社はみんな、自衛隊のものを作っていますね。重工という会社は勿論ですが、その他、学生の皆さんは想像も出来ないかも知れませんが、いわゆる電機会社もその一つですね。東芝、三菱電機、日立、富士通、沖電気・・・こういった会社がですね、みんな自衛隊のものを作っていますね……どっか抜けたかな？ 抜けると、関連企業の人も聞きに来ているかも知れないので（場内爆笑）。富士通は抜けたかな。言った？（場内笑）名前を聞く会社はですね、みなさん、殆ど自衛隊のものを作っているんですね。

— 極東の軍事情勢と 21 世紀における我が国の進路（その 7） —

日本はですね、アメリカと違い、防衛産業が売上げの多くを占める会社は無いんですね。アメリカの防衛産業というのはですね、ロッキード・マーチンとかボーイングとか、軍に納めるものが利益の 50%以上を上げる、あるいは 7 割に迫る会社もあります。でも日本の場合はですね、20%も行く会社は無いんですね。重工メーカーでも 20%も行かないし、電機会社になると 1%とか 3%ですね、せいぜい多くても。だから、要するに自衛隊の商売をしなくてもですね、会社の経営上はあまり問題ないんです。ただ、それが無くなってしまうと困るのは、どちらかと言うと自衛隊側なんですね。日本というのはですね、やはりこの会社の調達も国家の為に貢献が出来るというのは素晴らしいこと、当然だということで続けられるんですね。実は防衛というのはあまり儲からないんですけれども、国家の為にということで、利益の追求はその次ということで頑張ってきて頂いたという風に思っています。ですけれども、今は日本もですね、アメリカのように株主の利益が重視されるようになりました。そうすると、そんなに儲からないなら（防衛部門を）捨てるか、どこかに売り渡したらどうかと言われると、自衛隊が困っちゃうんですね。お願いだから売らないでください。お願いするしかないんですけれども。そういう意味では、自衛隊は、やはりある程度の利益を、せめて損をしないように保障していかなければ会社が続かないということですね。そういう意味では、日本というのは昔からですね、公の為に尽くすのは素晴らしいことだという、日本国民が明治維新以降、尊敬された素晴らしい特性を持っていますね。だから自衛隊も、それに甘えている訳には行かないんですけれども。今後やはり、どうやって防衛産業を維持して行くかということも、十分考慮しなければならないという風に思います。

軍というのはですね。そういう意味で、諸外国においては、軍は権威の象徴であるし尊敬もされています。軍と会社が一体となって防衛力の維持をする、軍事力を維持するという格好が取られていますね。日本の場合は、予算が単年度の予算ということで、今年度の予算は今年度の夏までに執行しなければいけません。来年の事は分からないんですね。来年の 3 月になって国家予算が成立しないと、どうなるか分からないというのが日本の予算制度です。そうすると日本の場合は、防衛産業は武器輸出が出来ませんから外国に売れないんです。自衛隊だけがお客さんです。その自衛隊が、来年はどうするか分からない。再来年はどうするか、もっと分からない。そうい

うことだと、会社の経営計画も立ちません。そういった辺りをですね、今後どうしていったら良いのかということをお我々自衛隊が真剣に考えなきゃいけないという風に思います。

— 極東の軍事情勢と 21 世紀における我が国の進路 (その 8) —

それからですね、私は去年の 4 月にイギリスに行ったんですけども、イギリスは軍と、BAE システムズという会社がありますが、5 年間という長期契約で軍事力を維持する、そういった事をやっていますね。イギリスに行った時に、ちょっと話は変わりますが、イギリスの皇室と軍は結構、密接にくっついてますね。エリザベス女王は士官学校の卒業式とかに行かれますね。また、チャールズ皇太子の弟のアンドリュー王子がおられますね。あのアンドリュー王子はイギリスの海軍兵学校の卒業ですね。そして、フォークランド紛争の時にヘリコプターのパイロットとして活躍されました。そしてウィリアム王子、チャールズ皇太子と故・ダイアナ妃の間に生まれた二人のお子さんがおられますね。ウィリアム王子とヘンリー王子。そのウィリアム王子は陸軍士官学校の卒業生ですね。今年の 4 月にウィリアム王子は空軍飛行訓練学校を卒業して、4 月 28 日にアフガンを訪れたという記事が前に、新聞に載っていましたね。

そしてヘンリー王子ですね。ヘンリー王子は同じく陸軍士官学校を卒業されて、実は去年の 12 月から今年の 2 月までアフガンの戦闘に参加されていました、掃討作戦。それがマスコミで、ヘンリー王子が行っているということが表に出てしまって、ちょっと危ないということで本国に戻られたということですね。

日本もですね、実は戦前はそういう状況でした。 (当時の) 皇太子殿下ですね、昭和天皇。10 歳を越えると陸海軍の少尉に任官されていますね。で、昭和天皇の弟の秩父宮殿下は陸軍に入隊されました、終戦時に陸軍中将ですね。それから、その弟の高松宮殿下は海軍兵学校の卒業ですね。終戦時、たしか大佐だったかと思いますが。それから、その弟の三笠宮殿下は同じく陸軍士官学校の卒業生ですね。終戦時はたしか少佐だったかと思いますが。そういう意味では、軍というのは権威と尊敬の象徴みたいなところがあるのですが、戦後の日本は、自衛隊というのは何か、おかしい組織ではないかというようなことが、一時かなり言われた事がありましたけれども、最近では自衛隊の活動も、いわゆるこの地道な活動が認められて、よくやっているのではないかと、ということの評価していただくことが多いということなんですね。

自衛隊は、去年以来色々不祥事とかが一杯ありまして、たいへん国民の皆様にご批判を受けました。少しだけ言わせて頂くと、自衛隊が犯罪を犯す率というのはどの位でしょうか。警察庁の犯罪白書によれば、1,000 人当たりの犯罪率がどのくらいかと言うと、国民全体では、この 5 年間で大体 1000 分の 19 前後、20 ぐらいなんですね。1,000 人いると約 20 人が犯罪を犯す計算です。航空自衛隊はですね、この 5 年間、どの位かと思いますが。1000 分の 1.5、です。1.5。全体から比較すると、大体 10 分の 1 から 15 分の 1 ぐらいなんですね。自衛隊が事故を起こすと、大々的に自衛隊という文字が取り上げられます。自衛隊大丈夫か、事故ばかりやってという事になるのですが、マクロな点から見るとそういう事なんですね。

ちょっと話が脱線してしまいましたけれども、防衛産業の話をしてたところから脱線してしま

いましたけれどもですね、防衛産業を少しは育成しないと日本の戦略は成り立たないという事ですね。これをどうやるかと言うと、我々も一緒に考えなければいけないということですけども、これはですね、本当に各国ともですね、自分の国の軍需産業を育成するということは真剣に考えています。そうでないと、各国とも軍事力が維持できないということなんですね。

日本は随意契約が多いと、自衛隊も批判されるのですが、実はこれもですね、随意契約という学生の方は分からないかも知れませんが、自衛隊や国がモノを買う時は、一般競争入札。皆さん聞いてください、一般競争入札です。それと、指名競争入札という方式があります。あなたとあなた、あなただけ来てくださいというのが指名競争入札ですね。それと随意契約、私はあなたの所から買いますという方式です。基本的には一般競争入札ですね。しかし、もうその会社しか作れないとかですね、そういう理由があれば、その会社との随意契約が認められるという事なんですね。これもですね、データで見ますと、航空自衛隊の補給本部で2万件ぐらいの契約を毎年するのですが、2社以上が競争に応募してくるというのは100件もいきません。大体70件ぐらい、そんな感じですね。従って、この一般競争入札を行う手間隙というのは、実はすごく大変なんですね、税金をかけて。もうひとつ大変なのは、会社からすれば、自分と隣、仮に2社しか作っていない。しかし本当に、自分のところから買ってくれるのだろうか。自衛隊しか売先がない訳です。そうするとこういったことがですね、一体、その競争入札で維持していけるのかというと、やはり問題がありますね。そういった事も考えていかなければなりません。

※本講演録は当ブログの管理人が個人的に素起したものであり、また全ての著作権および記述の細部は田母神航空幕僚長、ならびに主催の東京大学・国家安全保障研究会が優先します。

東京大学・五月祭にて

2008年5月24日に現職自衛官として初めて、東京大学五月祭にて安田講堂で、「極東の軍事情勢と21世紀における我が国の針路」というテーマの講演を行い「将来リーダーとなる東大の学生の皆さんは高い志を持って燃えて欲しい。上が燃えないと組織は不燃物集積所になる」などの発言をした。この講演に先立ち、講演が行われることを知った当時の防衛大臣石破茂は上記の「そんなの関係ねえ」発言を受け、「いいですか。あなたは一個人、田母神俊雄ではありません。私の幕僚です。政府見解や大臣見解と異なることを言うてはいけません。いいですね」と釘を刺した。尚、当該講演においても、戦前日本の侵略国家性への疑問について、上記論文に書かれていたような具体例・データ等を出しつつ、多くの時間を割いて主張した。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%B0%E6%AF%8D%E7%A5%9E%E4%BF%8A%E9%9B%84>